

行形4集粒では‘Fischer’の法則はあてはまらないように思われる (Figs. 3, 4)。

4) 個々の花粉管口には口蓋があり (Fig. 2), 花粉粒が乾燥状態の時は閉じているが, 吸湿状態では開いている (Plate XX. I-L)。口蓋は外壁の一部からできているものと思われる。

5) 外壁は比較的厚く半透明である。表面の彫紋は小刺状で, 長さは1-2 μ あるが先端は鈍いものが多い。また非常に小さな刺状突起が表面全体に見られる。

以上の観察結果からムジナモの花粉粒はモウセンゴケ科の他の属のものと, 大きさや表面の彫紋など類似した点もあるが, 花粉管口の形態や数, とくに位置が異なっている。また口蓋を持つ花粉粒はモウセンゴケ科の中ではムジナモだけのものである。

□ M. J. Harvey & J. McLachlan: *Chondrus crispus* xiii+155 pp. Nova Scotian Institute of Science, 1973. 並製本, 6カナダドル (約1,600円), 上製本, 9カナダドル (約2,300円)。*Chondrus crispus* は紅藻植物, ツノマタ属の海藻で, おもに大西洋の北半球に分布し, カラゲーン (carrageenan) の原藻としてよく知られる。カラゲーンは粘質の多糖で, 各種食品, 薬品, 化粧品安定剤や分散剤, あるいは織物の糊料などに用いられ需要も大きい。カナダにおける年産額は3百万ドルに達し, さらにこの物質について二次産業が発達すれば, 年産額は3千万ドル以上への飛躍が期待されるという。この本は *Chondrus crispus* について, 1972年6月, カナダ植物学会と植物生理学会が共催して行ったパネルディスカッションの全内容を採録したものである。内容の主な項目は次のようである。*Chondrus crispus* の生物学, とくに分類, 形態, 生活史。細胞学と遺伝学。生態学。生理学と生化学。微細構造と組織化学。カラゲーンの化学。*Chondrus crispus* に関する文献。執筆者はカナダとアメリカの学者13名よりなる。*Chondrus crispus* の総合的研究ともいべき内容の本であり, 有用藻類研究法の一つのあり方を示すものともいえる。購入申込先; The Librarian, Nova Scotian Institute of Science, c/o Science Library, Dalhousie University, Halifax, Canada. (千原光雄)

□ 中国植物学会編: 植物分類学報 第11巻4号。しばらく休んでいた中国植物分類学報が発行された。将・李氏の中国のキョウチクトウ科についての論文は1新属20新種がのせられている。将英氏は40年ほど前からキョウチクトウ科の研究をつづけているが, なおこれだけの新しいものがでることは, 中国植物の研究の多難を思わせる。琉球のテイカズラなど中国のものが明らかにならないとはっきりしないものもあるので今後の研究を期待する。林・陳氏の *Erigeron* 類のまとめ, 向・曾氏の中国の人参属など興味深い論文がある。後者は原寛氏の *Panax* の論文も引用し, ほぼ似た見解であるが, 亜種を認めていないため学名はかなり異っている。(山崎 敬)